



## Be creative !

# 「沖縄返還50年」本校の修学旅行を振り返る

あの1972年5月15日、中学生だった私は偶然にもこの日、東京にいた。修学旅行の初日、デモ隊と機動隊に囲まれた国会議事堂を見ることになる。あの日から50年。再び、本校の修学旅行で沖縄と出会う。沖縄返還 50 年に合わせ、本校の修学旅行の取り組みを私の視点から振り返ってみようと思う。

## ★2021 年度修学旅行のしおり巻頭言—20 年ぶりに修学旅行を見送る人となる

今からもう 30 年近く前のことになる。広島県の元安川にて原爆瓦を川底から掘り起こすというクラス活動に取り組んだ。一人の男子生徒が制服のボタンを拾い上げた。原爆投下時の男子中学生の制服のボタンだとわかる。拾い上げた生徒は一瞬「宝物」を見つけたかのように喜んだ。そして黙り込んだ。手の中のボタンはあまりに重いものだった。広島県の似島（にのしま）にもクラスで出かけた。船に乗れた喜びにまるでピクニックに行くかのような気分だった。みんなで牛乳も飲んだ。そこには戦時中大きな検疫所があり、すでに野外センターとなっていた跡地には大きな焼却炉が戦跡として残されていた。海外の戦地に連れていかれ、病気やけがを負い、治療の見通しの立たない軍馬を処分するのに使った大きな焼却炉だった。広島に原爆が投下された数日後、その焼却炉は市内から運び込まれたおびただしい人間の遺体を一度に焼くことに使われたと知らされる。みんなで飲んだ牛乳が少し苦く思われた。



そして、20 年前、長年続いた広島修学旅行を沖縄修学旅行に変えた時、私はその下見で案内された高層ホテルのベランダからたまたま階下を覗き込んだ。そこには昔ながらの小さな赤瓦の沖縄の民家があった。それはあまりにも小さく、目を凝らして見てみると、腰の曲がったおばあさんがとことこと家から出てきて、その家の前の小さな畑で作物を育てていた。

私はその時浮かれていたのだ。初めて飛行機に乗って、南国の沖縄にやってきて、見たことのないコバルトブルーの海を見て、修学旅行の下見であるが故に丁寧な接待を受けて、大きくてきれいなホテルに案内されて、浮かれていたのだ。腰を曲げ、小さな畑で作業する沖縄のおばあ。そのおばあに聞いたかった。その畑から採れる野菜は何ですか、その野菜でどんな料理を作るのですか、こんな高層ホテルの日陰となり、何を思って暮らしていますか。家族はいますか。そして、あの戦火をどうやって潜り抜けてきたのですか。おばあさんの小さな背中を見つめながら、浮かれていた自分を恥じた。私は沖縄の何を知りたいのか。何を生徒に伝えたいのか。このおばあさんのあまりにも小さな背中が、沖縄修学旅行の在り方を考える私の原点となった。「生徒たちに直球を！」—かつて私が生活指導部長として修学旅行の在り方を考えていた時のテーマだ。修学旅行でしか学べない、味わえない、そうした体験を積んでほしいとあの時も考えたし、その思いは今でもかわらない。心からそう願っている。

## ★「三ツ星の修学旅行を創る」—忘れられない修学旅行。初の沖縄は台風 19 号とともに。

かろうじて飛行機は沖縄に飛んだ。奄美大島には台風 19 号が待ち構えていた。その日の夜には暴風警報が発令され、翌日には交通機関が止まった。あわや、この小さなホテルに缶詰めにされるのかと思った時、思わぬ援軍が訪れ、私たちは沖縄南部の佐敷町にある体育館等の施設も備えた大きなホテルに

移動ができた。ただし、生徒が楽しみにしていたフィールドワークや海での体験活動はすべて中止となった。かろうじて今なら安里要江（あさととしえ）さんに依頼した平和講演ができる！そう判断した私たちは生徒をホールに集め、平和講演を行うことにした。不安だった。楽しみにしていたことは何一つできず、予定変更が度重なる中で、心を落ち着けて戦争について考えることができるのだろうか。

そんな心配は杞憂であった。生徒たちは2時間に及ぶ安里さんの講演（当時80歳）に真剣に耳を傾けた。この講演終了後、学年議長団代表の生徒は次のように自分の思いを語った。「修学旅行に来て、やっと修学旅行らしい取り組みができたことを本当にうれしく思う。安里さん、この台風の中、僕たちのために足を運んでくださり、ありがとうございます。添乗員の皆さん、自分たちの安全を守ってくださり、ありがとうございます。僕たちは台風に負けない。三ツ星の修学旅行を創る。」この言葉通り、この日の夕刻には、施設内にあった体育館にて、添乗員、看護師の方も含め、教員・学年全員で学年議長団の企画したゲーム大会を開催するとともに、翌日には暴風警報解除直後、戦跡フィールドワークへと彼らは元気に繰り出した。今から20年ほど前の出来事である。

**★安里要江さんとの出会い** 過酷な戦争体験と平和の尊さを語り続けてきた。沖縄戦当時24歳で、10・10空襲の直前に生まれた乳飲み子の娘と、幼い息子を抱える2児の母だった。戦況が悪化する中、子どもたちと病身の夫、高齢の親族らと共に戦場をさまよった。米軍の激しい艦砲射撃や機銃掃射などから逃げる中で母や義父母を相次いで亡くした。たどり着いた糸満市のガマで生後9カ月の娘を失った。栄養不足で頼みの母乳は出ず、冷たくなっていくわが子の体をさするしかなかったという。戦争を生き延びた夫や4歳の息子も栄養失調や戦時中のけががもとで間もなく亡くなった。親族11人が沖縄戦の犠牲になった。たくさんの肉親親族を失いながら、自分だけ生き延びてきた「後ろめたさと無念さと自嘲の入り交じった複雑な気分がぁ」り、その「精神的な後遺症は戦後も長く（自分自身に）影を落として」いたと言う。「真実を後世に伝えることが生き残った自分の義務」と心の傷を押して語り部を続け、大きな足跡を安里さんは残したのである。



修学旅行では事前に安里さんがまとめられた文章を学習し、事後は修学旅行の思い出を短歌にまとめ、互いの作品を鑑賞しあった。単なる感想文より、生徒が心の奥底で感じ取ったことが見える取り組みであった。私も、生徒とともに作品を作った。安里さんの思いに少しでも寄り添いたいと願った。

漆黒の闇の中にて死せる子の顔撫で見えぬ顔を見つめる—この作品は朝日新聞が主催する「八月平和の歌2015年」にて一般の部の優秀作品としてとり上げていただいた。うれしかった。

**★今月の言葉★** 沖縄県沖縄市 河野立子さん(60歳)が10歳の時に書いた詩  
1972年5月15日、この河野さんの詩が朝日新聞に掲載された。

わたしのねがい

復帰は／パスポートなしで／本土への行き来ができる／算数の本に出ているような／円生活に入る

1ドルは308円にかわり／お店では／今、わたしの着ている／7ドルのスカートが／2156円になる

お米が／バナナが／ノートが／何でもかんでも／×308

きっと、頭が／こんがらがらるだろうな／毒ガス／ばく音／ひきにげ／B52 / 苦しかった沖縄

復帰で／沖縄はほんとに／すぐわれるのだろうか

沖縄には／日本復帰で／平和になりたいという／強い 強いねがいがある

日本人々よ／それにこたえて／沖縄を／平和な県にしてほしい

